Health & Safety
News for your life from Yamagata University Hospital
山形大学病院ニュース
第18号
2008年10月
●山形大学医学部附属病院ホームページアドレス
www.id.yamagata-u.ac.jp/MID/index.htm

新病棟が開院しました

新南病棟を紹介します

山形大学医学部附属病院では、平成20年7月14日、多くのご来賓、教職員が見守る中、新南病棟の完成記念式典を挙行しました。

ここでは、新南病棟の、ほんの一部ではありますが、写真入りでご紹介します。

■手術部

手術部は、従来までの手術室9室から12室に拡充。術中MRIの設置など、先端医療に対応した各手術専用の手術室を配置するとともに、手術用器材の自動搬送システムを導入し、さらに効率的な手術室運営が可能となりました。

術中MRI手術室

鏡視下専門手術室

■救急部

救急部は、従前に比べ約4倍のスペースに拡充されました。救急車の進入経路を考慮し、2台の救急車に同時に対応できる救急搬入口を新南病棟の東側に設けました。

また、大規模災害時の救急医療へも対応できるよう、医療ガスアウトレットを設置しました。

X線装置を備えた救急処置室1

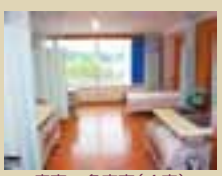
救急搬入口

救急観察室

■病棟

旧病棟では6床室だったものを4床室とし、一人当たりの面積の拡充を図るとともに、室内のあたたかみのある色調により、安心とやすらぎの空間となりました。

また、トイレや浴室も整備、男女各専用浴室に加え、ストレッチャーのままシャワーなどに対応できる介助浴室も備えるなど、患者アメニティーの改善を図りました。


病室：多床室(4床)

介助浴室

よりよい病院を目指して―

ごあいさつ

山形大学医学部長　嘉山　孝正

このたび、県民の皆様にとって、とても安心できる病棟、手術室、救急外来が、山形大学医学部附属病院にできました。山形大学医学部が昭和48年に開校し、それに並行する形で附属病院が開院してから、30年以上の年月が経過致しました。その間、建物は老朽化しましたが、医療の発展は目を見張るものがあり、また、国民が医療に期待する中身も大きく変わりました。その変化に対応する為には、医療の質の向上のみならず、ハード面の改善も求められていました。今回の新南病棟開院は、先端医療を実践する場の手術場、救急外来処置室および病室が、国際的レベル、すなわち本院が、世界でも最先端の病院へ変身した事を意味しています。更に、山形大学医学部附属病院は、医学教育をする場でもありますので、新南病棟の開院は、山形県の医療を将来担う医師、看護師の卵にとっても、先端医学を学べる事を意味します。また、県内の医療関係者の皆様にも、有効に活用して頂ける事を切に願っております。

ごあいさつ

山形大学医学部附属病院長　山下　英俊

まず初めに、このたびの新病棟建設にあたり、各方面の皆さま方からご尽力いただいたことに対し、附属病院を代表してお礼申し上げます。

山形大学医学部附属病院の再整備は、嘉山孝正現医学部長が病院長に就任（平成14年4月）以降、「患者中心の医療」を実現するための極めて先端的、独創的なプランのもと精力的に進められてきました。平成15年10月から、嘉山孝正医学部長を中心として検討を始め、疾患別診療センターの創設や患者アメニティーの向上、化学テロ対策の機能等を持たせることなどを盛り込んだ再整備案が平成17年度に認められ、平成18年3月に着工したのが新南病棟建設です。

このたび、新しい医療を創設し情報を発信していくための病院が、院内、学内の多くの方々のご協力の賜物として出来上がったことは、ただ単に山形大学医学部附属病院のみの発展ではなく、新しい時代の大学病院として、日本の医療界に貢献できる病院としてのスタートにほかなりません。

本病棟をはじめ、今後も再整備が続きますが、皆様方の益々のご協力をお願いします。

特集 introduction

「分子疫学の国際教育研究ネットワークの構築」

平成20年度 医学系グローバルCOEプログラム

拠点リーダー山形大学医学部長
嘉山 孝正

グローバルCOEプログラムとは？

文部科学省は、我が国の大学が世界のトップレベルの大学と伍して教育及び研究活動を行って行くためには、第三者評価に基づく競争原理によって大学間の競い合いがより活発に行われることが重要であると考え、平成14年度から大学の構造改革の一環として、世界的な研究教育拠点の形成を重点的に支援し、それにより国際競争力のある世界最高水準の大学づくりを目指す「二十一世紀ＣＯＥプログラム」を実施いたしました。この取り組みの中で山形大学は平成15年度医学系分野において「地域特性を生かした分子疫学研究」が採択されています。その取り組みを踏まえ、学際・複合・新領域も含めたすべての学問分野を対象として、特に産業界も含めた社会のあらゆる分野で国際的に活躍できる若手研究者の育成機能の抜本的強化と国際的に卓越した教育研究拠点の形成を狙い、ポスト「二十一世紀ＣＯＥプログラム」として平成19年度より実施されることになったのが「グローバルＣＯＥプログラム」です。

「グローバルＣＯＥプログラム」は、医学系、数学・物理・地球科学、機械・土木・建築・その他工学、社会科学、学際・複合・新領域の５区分からなり、それぞれの分野で国際的に通用する研究教育拠点の形成を目指しています。

山形大学の取り組み

山形大学は、このグローバルＣＯＥの獲得に向けて３年前から大学院の大改革や新たな教育研究拠点づくりを始めていました。その内容は「二十一世紀ＣＯＥプログラム」より継続してきた分子疫学研究の研究対象に加えて、新たに「がん」を対象とし、向後の日本の医療で問題となる疾患をすべて網羅するタスク設定を行っています。さらに研究教育組織として、既存の組織を超えた「先端分子疫学研究所」（図１）を立ち上げました。

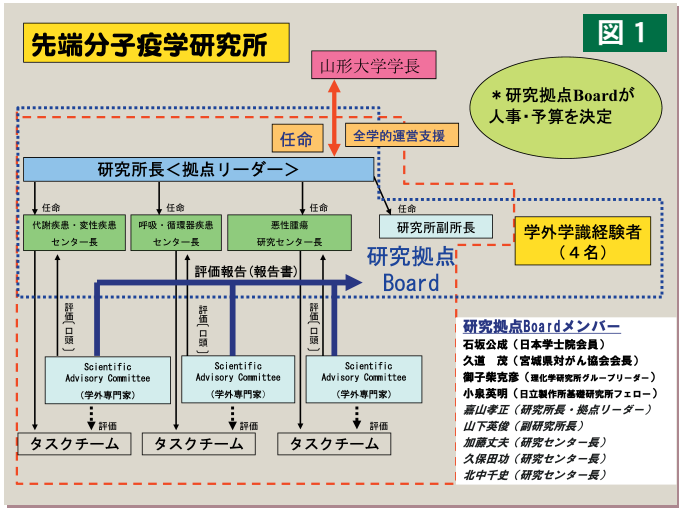
先端分子疫学研究所は、研究所長および副所長のもと、代謝疾患・変性疾患研究センター、呼吸・循環器疾患研究センター、悪性腫瘍研究センターの３部門に分かれ、ゲノム情報データベースの構築、遺伝子多型の検索とともに各分野の分子疫学的研究を進めていきます。また本プログラム内の財政を含む全体的な構想計画は、研究拠点Boardを設置して立案するという従来の日本の大学では見られないユニークな体制をとります。本Boardは、研究所長、副所長、３部門の研究センター長、および学外の学識経験者４名によって構成されます。学識経験者には、石坂公成（米国ラホイヤアレルギー免疫研究所名誉所長、日本学士院会員）、久道　茂（宮城県対がん協会会長、東北大学名誉教授）、御子柴克彦（理化学研究所発生発達研究グループディレクター）、小泉英明（日立製作所基礎研究所フェロー）と国内の錚々たる科学者達が名を揃えています。さらに３部門にはそれぞれ、学外の専門家からなるScientific Advisory Committee（SAC）をセンター毎に設置し、各センターでの研究成果の評価が行われます。また本研究所の研究者に関しては、機動的な組織運営を行うために従来の大学任免制度にとらわれない抜本的任命制度改革を行うなど、本プログラムではまさに国際的な競争力の醸成を見据えた制度改革を行っています。

また、分子疫学的研究においては、人なら日本人という特定の人種、民族で解析された知見が人種の壁を越えて成り立つのかどうかを検証することも極めて大切です。そのため、米国ユタ大学が行っている「ユタ・コホート」や、アイスランド国家とDeCODE社が共同で行っている「アイスランドコホート」とも連携し、日本―欧州間での検証研究を行うことも決まっており、世界基準の研究基盤を形成することを目指しています。

グローバルCOE採択の意義

平成20年度医学系の申請は、全国62大学、72件の申請があり、最終的に採択されたのが13大学、14件でした。今回採択された大学・研究施設を見ると、大半は旧帝国大学であり、また中には獣医学や歯学も含むため純粋な医学分野の大学医学部が先導するものに限ると非常に限られた枠の中に山形大学が選ばれたことがわかります。このことは、非常に名誉なことであるとともに、本プログラムを通して国際的な教育研究拠点を山形の地に形成する義務を国民の皆さんに対して負ったことになります。現在、気持ちを引き締め、医学部教員一丸となって本プログラムに取り組んでいます。

図１



学部教育から専門医教育までの一貫した医師養成コースを新設

山形大学医学部では、平成20年10月16日に記者会見を開催し、医師確保及び診療科偏在を解消するため、医師の減少の著しい小児科、産婦人科、救急医学、外科の医師養成の為の専修コースを新設することを発表しました。

日本の医師不足を解消するため医学部定員増を行うことが国の施策として決定されましたが、増加した学生が、将来、本当に医師不足が著しい地域や診療科において診療に従事するための教育・研修プログラムが示されている訳ではありません。単なる入学試験における地域枠の設定等で対処できる問題ではないことは明らかです。

そこで山形大学医学部では、山形県と連携した実効性のある「地域や診療科の医師確保対策」として、３年間の学費免除などを盛り込んだ、我が国初の「学部教育から卒後臨床研修、専門医教育（後期臨床研修）までの一貫した医師養成コース」を開設することになりました。

期待される効果としては、入学時点ではなく、臨床修練を開始する学年である４年生の時点で選択する専修コースを新設することにより、より明確に当該診療科を将来専門とするモチベーションを持つ学生を支援することができることと学部教育から専門医教育までを山形大学医学部及び附属病院を中心として行うことにより、県内定着率を向上させ、将来にわたって山形県の地域医療に貢献する医師の養成が期待できることです。

嘉山医学部長は、記者会見で「医師の地域バランスや診療科の偏在を解決しなければ、問題の解決にはならない。医師は、専門医教育を受けた病院、地域に残る傾向が強く、今回新設するコース修了後も、地域への定着がかなり期待できる」と話していました。

記者会見の様子

人間性豊かな信頼の医療

高畠町 研究で明らかになったわが国の慢性腎臓病

循環・呼吸・腎臓内科学分野
久保田 功

慢性腎臓病（CKD）の概念が普及してきている

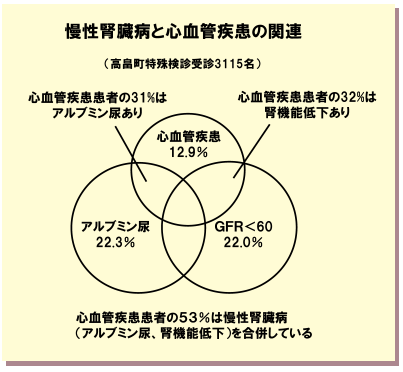
慢性腎臓病（Chronic kidney disease; CKD）は2002年に米国腎臓財団が提唱した新しい腎臓病の概念で、蛋白尿などの尿異常または腎機能低下（糸球体濾過量：GFR＜60 ml/min/1.73m²）があれば、原疾患に関係なく慢性腎臓病と診断され、GFRの低下に応じてステージ1～5までに分類されます。この概念はシンプルで簡便なため現在世界中に普及し、日常臨床に用いられています。日本腎臓学会の推定では日本では約1300万人（成人の8人に1人）が慢性腎臓病に該当するとしています。

慢性腎臓病は腎不全のみならず心血管疾患のリスクである

現在27万人以上いる透析患者に対する医療費は約1兆円であり、年々増加傾向にあります。その理由として、多くの潜在的な腎臓病が診断されず、適切な治療も行われていないことがあげられます。さらに、慢性腎臓病は心筋梗塞や脳卒中など循環器疾患の危険因子であることが、多くの疫学研究で示されています。欧米の研究は、ごく軽度の蛋白尿（アルブミン尿）でも心筋梗塞、脳卒中などの危険性が上昇し、慢性腎臓病の治療は心血管イベント予防に有効であることを報告しています。また、生活習慣の是正、減塩、薬物使用などの介入は早期であるほど、改善または進行抑制効果が大きいとされます。よって、慢性腎臓病をできるだけ早期に発見し治療することは、腎不全のみならず、心血管疾患（脳卒中や心筋梗塞）の予防において非常に重要です（慢性腎臓病患者の相当な割合は透析に至る以前に心血管疾患で死亡しています）。

世界が注目する高畠町研究

高畠町研究では、本邦で初めてアルブミン尿と推定GFRを組み合わせて、日本人一般住民の慢性腎臓病を解析しました。その結果、受診した40歳以上の一般住民の38％が慢性腎臓病に該当することが明らかになりました。通常の尿試験紙検査では検出できないアルブミン尿陽性が22％、腎機能低下（GFR＜60 ml/min/1.73m²）が22％にみられ、両者の重なりはお互いの3割程度でした（図）。また心血管疾患の既往をもつものの53％が慢性腎臓病を合併していました。このことは、日本人一般住民において、今まで考えられているより高頻度に慢性腎臓病が存在し、心血管疾患と強く関連することを示しています。さらに尿検査または腎機能検査のどちらか一方のみでは、腎臓病を見逃す可能性が高いことになります。また危険因子解析の結果から、高血圧、糖尿病、加齢など古典的因子の他に、免疫異常、遺伝多型、塩分摂取などの因子が慢性腎臓病発症に関与する結果も得られています。これほど大規模のコホートで、生活習慣、遺伝多型を含めて総合的に腎臓病を解析している研究は世界的にも例がなく、今後の成果が注目されています。



21世紀COEからグローバルCOEへ

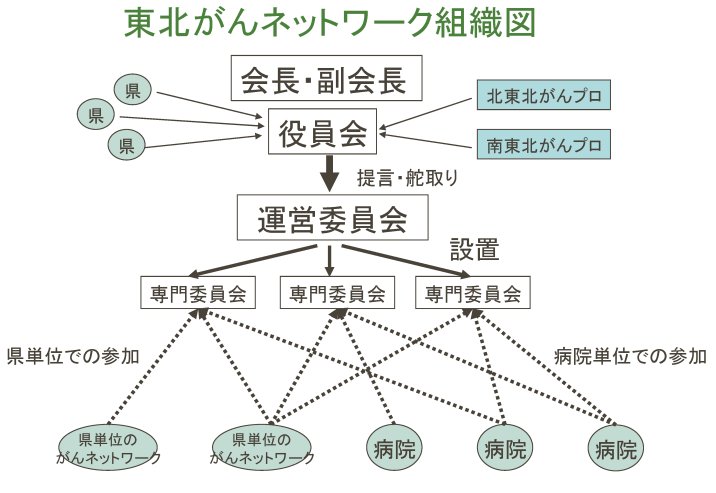
これまでの高畠町研究の解析結果から、日本人一般住民に潜在的な慢性腎臓病が非常に多いこと、そしてその大部分は治療されていないことが明らかになりました。未治療の慢性腎臓病が多いことは、日本人における末期腎不全や心血管イベント発症に大きな影響を与えています。今後は追跡調査と遺伝多型解析結果を統合し、腎臓病の早期発見治療・心血管疾患予防のための効率的なスクリーニング法を確立する予定です。またアルブミン尿発現や腎機能低下の危険因子の中には欧米人では報告されていない日本人固有のものもあります。それら危険因子の解析を進め、日本人の生活習慣、食事、体質を考慮した適切な介入方法を明らかにすることを目標としています。

広域 がんネットワークの取り組み（東北がんネットワーク）

がん臨床センター
根本 建二

がん対策基本法に対応し、さまざまながん対策の取り組みが始まっていますが、病院、大学、県単位の取り組みのみでは、先進医療機器の偏在や共有できる情報が限られるなど、問題も明らかになっています。そこで、がん医療に関わる取り組みを、東北という広い枠組みでとらえ、情報・意見交換や、共同での事業実施を行う、広域ネットワークを構築することで、より効率的ながん医療均てん化やがん医療人の育成が可能になると考えられます。

組織構成は、ネットワークの重要事案を審議する役員会（会長：久道茂：宮城県対がん協会長、副会長：嘉山孝正：山形大学医学部長、吉田茂昭：青森県立中央病院長）、ネットワークの運営を行う運営委員会、具体的な取り組みを行う専門委員会からなります。実際の活動の中心となるのは専門委員会で、当初、1）がん登録（西城茂：宮城県立がんセンター病院長）、2）地域連携パス（望月望：岩手県立中央病院副院長）、3）がん患者相談室（齋藤聡：青森県立中央病院消化器内科）、4）化学療法（石岡千加史：東北大学腫瘍内科）、5）放射線治療（根本建二：山形大学放射線治療科）、6）緩和医療（蘆野吉：十和田市立中央病院長）の6の専門委員会（カッコ内委員長）を設置します。情報共有と合理化、省力化を目指した交流事業を活動の中心とし、病院、大学、がんプロフェッショナル養成プラン、県のがん診療連携協議会など、任意の単位で希望する専門委員会に参加できることとしています。去る8月24日、仙台市にて設立総会が開催され、今後は専門委員会毎に実際の活動が開始される予定です。



人間性豊かな信頼の医療

病院 introduction

山形 大学医学部附属病院ＤＭＡＴ出動

救急部副部長 伊関 憲

平成20年6月14日土曜日の8時43分に山形市内では震度4の地震がありました。後に岩手・宮城内陸地震と呼ばれています。マグニチュード7.2で、宮城県栗原市や岩手県奥州市で最大震度6強を観測しました。幸いにも大学病院では異常は無く安心していたところ、8時53分に厚生労働省から全国のＤＭＡＴ隊員の携帯電話に、待機要請のメールが一斉配信されました。

ＤＭＡＴ（Disaster Medical Asistance Team）とは、災害発生時に急性期医療を行う災害派遣医療チームです。この要請に従い物品の準備を行い学内に待機していたところ、宮城県より山形県に対してＤＭＡＴの派遣要請が出された旨の通知がありました。そこで嘉山孝正医学部長の許可を頂き出動いたしました。今回の派遣メンバーは伊関憲（救急部）、佐藤貴美（7階東）、斎藤史枝、會田美幸（集中治療部）、長岡一宏（総務課）の5名です。

市立栗原中央病院が集合場所となり、15時30分に到着しました。そこには東北中の病院だけではなく関東からもＤＭＡＴが参集していました。集結地点でも情報はテレビから伝えられるものが最も多く、情報不足の感がありました。そのテレビより栗駒山にある駒の湯温泉が土石流で流され、また工事現場でも被害者がいる、岩手県側では観光バスの転落との情報でした。栗駒山では道路が寸断されているため、ヘリコプターでないと災害現場にも行けません。また、ドクターヘリで乗り込んだ福島医大チームも、駒の湯周辺の災害現場で水が出ており危険なため立ち入れませんでした。このため、結局栗原中央病院で2日間待機した後に解散となりました。夜間は他のチームが仙台市内に宿営したのとは逆に、我々は震源地に近い一関の宿を取り、岩手県立磐井病院や各県消防の災害救援チームと情報交換をおこないました。震度4以上の余震が一晩中続き、いつまた巨大地震に襲われるか分からない状況でした。

ＤＭＡＴは、東京都や厚生労働省が取り組みはじめてから、ＪＲ福知山線脱線事故や新潟県中越地震などで活躍し注目を集めています。災害医療には日頃からの準備が大切とされていますが、いかに機能するかは日頃の救急活動の延長にあると思います。大学病院救急部では益々通常の救急業務を充実させ、いつ災害が発生したとしても、迅速な対応をしていきたいと考えています。

◀9月22日 山形DMAT指定証交付式の様子 ▼

病院の動向 脳ヘルニアの患者さん、奇跡の生還

平成20年3月31日、脳死一歩手前、たとえ助かったとしても植物状態か、それに近い状態になることがほとんどである様な重態で本院に救急搬送された男性の患者さんが、搬送後の救急部及び脳神経外科スタッフの迅速な判断と適切な処置により一命を取り留め、その後順調に回復し、6月2日に無事退院されました。このことは、退院当日、合同取材に応じた脳神経外科長でもある嘉山医学部長が「死に至る確率が高く、意識が回復せず寝たきり状態になる可能性も高かった。ここまで回復できるのは、極めてまれ。一刻を争う状況で、迅速な判断が救命につながった」と振り返る〝奇跡の生還〟。

男性患者さんは、来院時、意識は深昏睡、両側瞳孔は散大し、対光反射ももう認められない脳死一歩手前の脳ヘルニアの重態であり、頭部ＣＴでは、巨大な急性硬膜外血腫を認め、生命に関わるのは一秒一刻を争う状態でした。患者さんの状態は、脳神経外科に即座に報告、連絡を受けた嘉山脳神経外科長らが救急外来に駆けつけ、一刻を争うと判断、救急外来で穿頭術を行い、血腫を吸引し、危険な脳ヘルニアに陥ってる状態を脱した後、手術室において開頭血腫除去手術を行いました。

一般的に、このような脳ヘルニアを起こした重態では、数分で呼吸が止まり死に至ります。手術を行い生命が助かっても、植物状態かそれに近い状態になることがほとんどです。

合同取材の後、病院内において、今回奇跡の生還となった患者さんへ、病院スタッフから花束の贈呈が行われました。報道機関からのインタビューに応じた患者さんは「少しでも処置が遅れたらここにいなかった。病院の先生方には、本当に感謝している」と話していました。

このたびのことは、新聞、テレビ等の報道機関でも取り上げられ、近年、救急車の受け入れ困難が社会問題となっていたり、暗い話題が多い社会にあって、山形県の救急医療の健全性を示す朗報となり、併せて県民の皆さんに対し明るい話題を提供することができました。

また、合同取材の際に嘉山医学部長の「厳しい症状でも、救命救急の現場があきらめずに頑張れば、患者を救えることを証明できたのではないか」の言葉が印象に残りました。

患者さんへ花束を贈呈し、退院を祝う病院スタッフ

community

イベント

ハートフルコンサートを開催

6月24日(火)、外来玄関ホールにおいてハートフルコンサートを開催しました。このコンサートは、山形大学医学部の学生を中心とした医学部室内合奏団、医学部合唱団らが、医学部附属病院に入院中の患者様を対象に平成7年から継続的に開催しているもので、今回で24回目。「スター・ウォーズのテーマ」をオープニングに「ドラえもんのうた」「愛燦燦」など全9曲を披露しました。約1時間のプログラムは、盛況のうちに終了し、アンコールでは花笠サークル四面楚歌による花笠踊りが披露されるなど患者様はじめご家族の方々、病院関係者約300人が楽しい時間を過ごしました。

行事

グローバルCOEプログラム採択記念式典及び祝賀会

7月31日、グローバルCOEプログラム採択記念式典及び祝賀会が開催されました。

このたび採択された山形大学医学部の「分子疫学の国際教育研究ネットワークの構築」は、文部科学省の「グローバルCOEプログラム」において、全国の国公私立大学から、医学系分野においては62大学72件の申請があり、その中から採択された上位14件の1つです。

式典には、日本学士院会員の石坂公成先生、山形県及び大学関係者ら約130人が出席しました。

記念式典では、本プログラムの拠点リーダーで先端分子疫学研究所長である嘉山医学部長から挨拶があり、続いて来賓の方々からの祝辞の後、採択された事業の概略について、嘉山医学部長から説明がありました。

祝賀会では、嘉山医学部長の挨拶に続き、坪井元山形大学長から祝辞が述べられ、先端分子疫学研究所長副所長である山下医学部附属病院長の発声で乾杯、和やかな雰囲気の中でグローバルCOEプログラム採択を祝いました。

行事

医学部公開講座「看護師のキャリア・アップを目指して」を開催

9月20日(土)、27日(土)の両日、専門看護師や認定看護師等の高度な看護職業人の育成と活用促進を目的に、キャリア・アップの現状報告、現職の認定看護師5名によるキャリア形成の具体的な方法論の紹介、キャリア・アップの課題と展望の講演を内容とする公開講座を開催しました。

公開講座には、山形・秋田・宮城各県の医療施設から看護管理者、看護師、高校教諭等115名の参加がありました。質疑応答・ディスカッションにおいては、「認定看護師として病院に希望すること」、「認定看護師と一般の看護師との違い」、「職場での受け入れ環境」などについて質問があり、看護師のキャリア・アップの現状と体制整備等に関して、活発な意見が交わされました。

また、講座終了後のアンケートにおいては、講座が「とても有意義だった」、「まあまあ有意義だった」が過半数を占め、自由記述では「キャリア・アップを目指している若い看護師にも聴講できるよう、複数回の開催を望む」、「認定看護師が横断的に活動するための組織の在り方を知りたい」、「看護管理者であるが、今日の講義を聴いて、自分ももっとキャリア・アップをしていきたいと思った」など、看護師のキャリア・アップは、極めて関心の高い課題になっていることがわかりました。

行事

新南病棟完成記念式典及び祝賀会

7月14日(月)新南病棟の完成記念式典及び祝賀会が開催されました。式典には、地元選出の国会議員、山形県知事、文部科学省、建設関係者及び大学関係者ら約200人が出席、新南病棟の完成を盛大に祝いました。

記念式典では、嘉山医学部長から、新南病棟のコンセプトや長かった同病棟開院までの道のりなどを交えながらの挨拶があり、式典終了後には、新南病棟前でテープカットが行われました。

テープカットの後、新南病棟が披露され、出席者は救急部、手術部、7階病棟を見学。中でも、7階病棟の見学で病室に入った見学者からは、大きなガラス窓から見える風景に、感嘆の声があがっていました。

祝賀会にも、多くの来賓、関係者が出席し、和やかな雰囲気の中で新南病棟の完成を祝いました。

イベント

花笠パレードに参加

8月7日(木)、医学部及び附属病院の教職員、看護師を中心とする総勢180名が、東北四大まつりの一つとして全国に知られ、山形の真夏の夜を彩る「山形花笠まつり」に参加し、艶やかな踊りを披露しました。

花笠まつりには、職員レクリエーションの一環として、医学部及び附属病院から毎年参加しており、今年も例年に負けないぐらい多くの参加者が集まりました。出発前には、病院の中庭において、患者様に花笠踊りを披露、お祭りの雰囲気を十分堪能していただきました。これもすっかり恒例となり、患者様から多くの拍手が送られていました。

花笠まつり会場では、「ヤッショ　マカショ　山形大」のかけ声と共に、それぞれが精一杯に踊り、それまでの練習の成果を披露、沿道の地域住民の方々や観光客から、多くの声援を受けていました。

イベント

プロのソプラノ歌手によるコンサートを開催

9月24日(水)10階エレベーターホールにて、10階病棟の患者様を対象としたコンサートを開催しました。このコンサートは、プロのソプラノ歌手として、県内外で演奏活動を行っている高橋まり子さんからの申し入れにより実現したものです。コンサートを開催することとなったのは、先日高橋さんが、本院に入院している友人のお見舞いに訪れた際、その友人の病気と闘う姿を見て、「彼女のために何かできないか、何かをしなければ」という気持ちで一杯になり、自分の友人をはじめ、入院されている方々の、癒しのひとときになる可能性があれば、是非とも病棟内でコンサートをさせて欲しいと本院に対し申し入れしたのがきっかけでした。

コンサートでは、山形大学の卒業生であり、現在は合唱伴奏者として山形、東京で多数のステージを踏んでいる須藤恵美子さんのピアノに合わせて、「からたちの花」「TOMORROW」など、アンコール曲をあわせ全8曲が披露されました。コンサート会場には、患者様をはじめご家族の方々や病院関係者が集まり、立ち見が出るほどの大盛況で、プロの歌手の美しい歌声に聞き入っていました。

人事往来 じんじ・おうらい

2008年10月
(20.6.2～20.10.1)

医学部

昇任	20.8.1	器官機能統御学講座［急性期生体機能統御学分野］(救急医学講座)	准教授 **伊関　憲**	(器官機能統御学講座　講師) から
採用	20.9.1	基礎看護学講座	講師 **石田　陽子**	(岩手県立大学看護学部助教) から
採用	20.10.1	麻酔科	講師 **中根　正樹**	(福島県立医科大学医学部講師) から

がんセンター講演会「緩和ケアとは」を開催

平成20年度の医学部がんセンター主催による講演会が、去る9月4日(木)に大講義室において本学職員210名のほか県立中央病院の医師も参加し行われました。

講師には、十和田市立中央病院長　蘆野 吉和（あしの よしかず）先生をお迎えし、「緩和ケアとは」と題し１時間にわたり御講演いただきました。

蘆野先生は、1986年から緩和医療に取り組まれており、講演では緩和治療を診療の当初からがん治療の一環として提供することや、緩和ケアの理念、コミュニケーションの大事さ、治療薬剤の使用法、そして終末期ケアに至るまでをわかりやすくお話ししていただきました。

本院でも、緩和ケアチームがこの10月から本格的に活動を開始しており、活動に向けてタイムリーな講演会となりました。

また、蘆野先生は8月に設立した「東北がんネットワーク」における緩和医療の専門委員長でもあり、東北の緩和ケアの中心的存在ですので、今後益々東北の緩和ケア充実に向けご活躍が期待されます。

編集後記 an editorial postscript

新病棟が開院され3ヶ月が過ぎ、今回のヘルス&セイフティでは、その一部を紹介しています。新病棟の開院によって、手術部・救急部が新しくなり、従来より質の高い医療を行う体制が整いました。

設備面だけではなく研究面でも大きな出来事がありました。山形大学がグローバルCOEプログラムに採択されたのです。全国62大学、72件の申請の中から13大学、14件が採択されその内の1件に山形大学医学部の取り組みが認められたということは、大変名誉なことです。また、同時に国際的な教育研究拠点を山形に形成しなければならないため、これからも一層尽力しなければなりません。

現在深刻な問題となっている医師不足を解消するにあたり、新たな試みとして人材育成・確保のため、山形県と連携し山形大学医学部に、専門医師養成コースが新設されました。全国でも初めての試みで、将来の地域医療の安定化・活性化が期待されます。

次号が制作される頃には、新しい医事システム（電子カルテなど）の導入が始まっている頃で、地域・他の医療機関・当院内での綿密かつスムースな連携が取りやすくなると思います。

編集委員会（高橋　和榮）

■発　　行　平成20年10月20日
■発 行 所　山形大学医学部附属病院
〒990-9585　山形市飯田西2丁目2-2
TEL 023(633)1122㈹
「山形大学病院ニュース」編集委員会
■編集委員長　山　下　英　俊
■事 務 担 当　総務課広報企画係　連絡先 TEL 023(628)5017
■印　刷　所　坂部印刷株式会社

●山形大学医学部附属病院ホームページアドレス
www.id.yamagata-u.ac.jp/MID/index.htm

PDCAサイクル発表会を開催

平成20年9月25日（木）17時30分から、大講義室を会場に「PDCAサイクル発表会」が開催されました。

この発表会は、本院における医療安全の取り組みについて研修するとともに、ISOマネージメントにおけるPDCAサイクルを評価・検証することを目的とし、医療安全管理部とISO事務局の共催により開催されたもので、細矢医療安全管理部長を座長とした発表会では、４部署から以下の題目の内容で事例発表がありました。発表会には、333名の参加者があり、各部署における業務改善等の報告や新たな問題点の発見など、大変有意義な時間となりました。

題　目
1. ４階西病棟「入院時のチェックシート・転倒転落事故防止フローチャート・危険物預かりフローチャート・ルートトラブル防止策フローチャート・抑制フローチャート　導入しての経過報告」
2. ６階西病棟「子供の安全を守るために注射のインシデントを減らすための取り組み」
3. リハビリテーション部「リハビリテーション部における急変患者に対するリスクマネジメント」
4. 薬剤部「処方入力時の『フリーコメント』使用に関連するリスク減少の試み」

祝 学会賞等受賞

川口　清先生……消化器・一般外科学分野
日本肝胆膵外科学会理事長賞　平成20年5月

大泉　弘幸先生……循環器・呼吸器・小児外科学分野
EAES Best Poster Award（EAES国際学会総会）　平成20年6月

村　成幸先生……運動機能再建・回復学分野
トラベリングフェロー選出（日本肩関節学会）　平成20年5月

岩崎　聖先生……運動機能再建・回復学分野
トラベリングフェロー選出（東北整形災害外科学会）　平成20年5月

成田　淳先生……運動機能再建・回復学分野
ベストペーパーオブザイヤー（日本膝関節学会）　平成20年6月

渡辺　忠良先生……運動機能再建・回復学分野
優秀論文賞（日本整形外科学会スポーツ医学会）　平成20年7月

荻野　大助先生……小児医科学分野
優秀演題奨励賞(症例報告部門)(日本小児腎臓病学会学術集会)　平成20年6月

北原　辰郎先生……循環・呼吸・腎臓内科学分野
Circulatiom Journal Award（Clinical Investigation）（日本循環器学会）　平成20年3月

原田　睦生先生……循環・呼吸・腎臓内科学分野
Circulatiom Journal Award(Experimental Investigation)（日本循環器学会）　平成20年3月

小田切　徹州先生……小児科
会長選出優秀YIA口演演題(日本小児循環器学会総会・学術集会)　平成20年7月

川口　雅一先生……皮膚科
日本皮膚科学会基礎医学研究賞（資生堂寄付）　平成20年4月

神尾　幸則先生……第一外科
日本肝胆膵外科学会理事長賞　平成20年5月

佐々木　幹先生……整形外科
トラベリングフェロー選出（日本リウマチ財団）　平成20年6月